

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

齋 藤 詰 吉

楞伽經所顯の要旨は如何なるものであるかに就いて、此の經の註釋者は多少その見解を異にする。(註二)或は五法、三自性、八識、二無我を以て本經の綱目を見、或は(註二)第一義心を以て宗趣となし、或は(註三)證(第一義心)修(當淨如來藏及藏識之名)を以て、宗旨と見てゐる。法藏の如きは、「入楞伽心玄義」に於て、(註四)「通じてこの經の宗趣を辨するに十あり」となし、一、無宗。二、唯妄想。三、自覺聖智。四、一心。五、二諦。六、三無等義。七、四門法義。八、五門相對義。九、立破無礙。十、顯密自在の、十義を擧げ、それに對して各々說釋をしてゐる。これに就いて、「入楞伽心玄義纂要鈔」には(註五)各註釋者の本經の要旨に對する見方は、皆一邊に墮すると云ひ、これに反して、法藏の十門の義は、最もその精要を得てゐるものとして賞讚してゐる。然し、各註釋者の見解も本經の根本的立場からするとき、その意味内容に於て、誤つてゐるものではなからう。

「佛語心論」や「楞伽經論疏折衷」が、本經全體を八十六に分章してゐるのを見ても知られる如く、

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

楞伽經の全體思想内容は多方面に亘つてゐて、然も經全體としては思想上の聯絡を缺き、断片的に一の思想を纏めつゝ書かれてあるのであつて、恰も(註六)「大乘綱目覺帳」の如き觀を呈してゐる。従つて、楞伽經の要旨を一の概念の下に言ひ表はすことは至難なことに相違ない。

それでは、楞伽經は單に大乘的思想の雜記に過ぎないのであらうか。若し單に大乘的思想の綱目の寄せ集めに過ぎないと云ふならば、それでは楞伽經の根本的立場を撥無することになるであらう。楞伽經の全思想内容がそれに依つて以て基礎附けられ、それに依つて以て成立してゐる所の根本的立場を見逃してはならない。今此の根本的立場を「自覺聖智の境界」(Paṭyātmāpatisocāra)と云ふ名に求めることが出来る。

先づ此の根本的立場を十卷楞伽、七卷楞伽の序品に就て見るに、即ち、佛陀は楞伽山に於て説法せんとするに當つて、遙かに楞伽大城を觀じ、「昔諸の如來應正等覺は皆この城に於て、自ら得る所の聖智の證法(Saṃpratyātmargajāna)を説き給へり。これ諸の外道の邪見を以て臆度し、又は二乗の修行する境界にあらず。我も亦今當にラヅナー王の爲めに此の法を開示すべし」(註七)と宣言し、更にラヅナー王及びその眷族は、如來自覺聖智の境界を切に聞かんことを願ひて、最勝の修行者たる大慧をして、佛にその自内證の境界を問はせしむるのである。又此のことは四卷楞伽經に就いて見ても明らかである。即ち、四卷楞伽の一切佛語心品第一に、

我名爲大慧

通達於大乘

分以百八義(註八)

仰諮尊中上。

世間解之士

聞彼所說偈

觀察一切衆

告諸佛子言。

汝等諸佛子

今皆恣所問

我當爲汝說

自覺之境界

と説かれてゐるのを見ても證明されよう。

菩提達磨が楞伽經を以て禪要を説くものとして、二祖慧可に附與したと云ふ歴史上の出來事の重要性を、楞伽經が自覺聖智の境界の如實なる顯現であると云ふ所に求め度いと思ふ。(註九)

楞伽經が禪宗と密接なる關係を持つものとして、常に經中の我は某夜最上覺を得てより乃至某夜般涅槃に至るまで一字を説かず(四卷四九九)とか、又愚は月を指すを見、指を見て月を觀ず、文字に計着する者は我が眞實を見ず(四卷五二〇)、とかが引用される。眞實の法は文字を離るとは經中屢説かれる所であるが、それらは自覺聖智の境界からは必然の歸結である。

經中に説かれてある四種禪の最上に位する如來禪(Trāhāgata Dh. āna)は(註十)、如來地に入りて自覺聖智の相の三種樂住を行じ、衆生不思議のことを成辨すると云ふのである。三種樂とは(註十一)、禪定樂、涅槃樂、菩提樂なりとも註せられてゐる。如來禪とは、此の自覺聖智の境界を指すものであることは明らかである。

又佛心宗(註十二)なる名稱の權輿をなすものは、馬祖道一が「楞伽經は佛語心を以て宗と爲す」と言つたのにあると云ふが、その佛語心とは如何なるものであらうか、四卷楞伽が各品悉く佛語心品の名を以て押し通してゐることは注意すべきことであるが、佛語心に就いては經中唯一箇所に出てゐる。即ち、

世尊。所說意識五法自性相。一切所佛菩薩所行。自心見等所緣境不_レ和合。顯示一切說成眞實義。一切佛語心。(註十三)

今これを七卷楞伽に比較して見ると、七卷の方では

世尊。唯願爲我說_レ心意意識五法自性相衆妙法門。此是一切諸佛菩薩。入_レ自心境離_レ所行相。稱眞實義。諸佛教心。(註十四)

と云ふのである。

七卷の入_レ自心境は、唯心の境界を意味するものと思はれるが、四卷の自心見等所緣境不_レ和合は十卷楞伽にも遠_レ離自心邪見境界和合故(五二三頁、孤の頁數は凡て大正藏經十六卷の頁數を指す)とあるから、一應妄想心を指すものと考へられる。七卷の方は「唯願くば、我が爲に心意意識五法自性相衆妙の法問を説き給へ。此れは是れ一切諸佛菩薩の自心の境に入りて所行の相を離れ、眞實に稱へるの諸佛教心なり」と讀むべきであり、又四卷の方は、説く所の「心、意、意識、五法自性相は、一初諸佛

菩薩の行する所、自心見等の所縁の境界は和合せず、一切の説の眞實義を成ずるを顯示す一切の佛語心なり」と解すべきものであると思ふ。七卷では、此是は衆妙の法問即ち心、意、意識、五法自性相を指示し、一切諸佛から稱眞實義までは諸佛教心を補飾する句であり、諸佛心は此是の述語であるし、四卷の方でも心、意、意識、五法自性相が主語となり、一切諸佛心では一切佛語心を補飾し、佛語心がその客語となるであらう。其故に一切佛語心とは、五法三自性八識二無我の四種法問を意味することになると思ふ。楞伽經で説くこの四種法問は(註十五)、瑜伽唯識の所謂五法三自性等とその名目は同じであるけれども、その意味内容に於て全く異り、楞伽經の四種法門は、一如來藏心の顯現であり、各々相即相入し、開合無礙にして、一切の佛法は悉くその中に包攝される。この法問を體認する時、即ち自覺聖智の境界に入るとせられる。それ故に佛語心とは一法界であり、自覺の境界を指すのである。その自覺の境界を説くのは法性佛 (Dharmatābuddha) であるとせられる。一説には(註十六)、楞伽經は明に漸悟説を唱ふるものとして、その證として、經中の所謂四漸の説を引用されてゐる。然し、楞伽經を漸悟的であると決めることは出来ない。何となれば、經では四漸と共に四頓を説くからである。即ち、衆生の自心現流(煩惱)を淨めるので、漸頓の二方面ありとして、果實漸熟。陶器漸成。大地漸生。習藝漸熟。の四漸の例、及び明鏡頓現。日月頓照。藏識頓知。法佛頓依の四頓の例を擧げるのである。そして後の頓に開悟するを説明する中に於て、法佛

(Dharmatābu-dha)が頓に報佛(Nisyanā-buddha)及び化佛(Nirmānabuddha)を現じて照躍する如くに、自證の境界も亦これと同じく、頓に法相を現じて光照し、一切有無の惡見を離脱せしむると説くのである(註十七)。この頓漸の思想は人々の機根に依つて頓と漸との二方面があると云ふことを意味するものと思はれる。

楞伽經では説法の相や建立問に執することを隨所に誠めてゐる。經中義と語とは峻別され、義は一切言説相を離れると云ひ、然も義と語とは不一不異の關係にあるものとせられ(註十八)、義の語に由つて表現されることは恰も燈の色を照すが如くであるとし、言語の燈に因つて言語を離れて自證の境界に入ると説き(註十九)、又宗通及び説通を説いてこれを修學すべしと云ふのである。斯くの如く自覺の境界に入るには、如何にその言語が重要性を持つかを現はしてゐるが、遂に言の如く義を取らば、建立及び誹謗に墮すと説くあたり、充分楞伽經の立場が見られるであらう。五法三自性等の法問に於てすら、若しその建立の相に執する限りに於て、愚妄の徒として退けられてゐる。經中所々に心・意・意識を離れよとか、又は五法自性の事見妄想を離脱せよと説いて、凡ての説相に執するの知見を破してゐる。「五法三性は是れ建立門、若し堂室に入らば何の門想か執せんや、諸修業の人は、稍もすれば名相に滯る、故に佛は語を造りて事見妄想と」と虎關師鍊禪師は釋してゐる(註二十)。又經中自覺を以て見る時は一切の法は不生なりと説くが(註廿一)、遂に他の場所に於て「一切

法不生とは、菩薩摩訶薩是の宗を立つべからず」と云つて（註廿二）、その説相に着するを破し、又我が立つる所の三乗は愚夫少智の爲めにして、第一義門に於て何ぞ三乗を建立せんや（四卷四八七頁）と説き、又經中一應五性の各別の義を説いてゐるが、それは衆生をして無所有地に入らせしめんが爲めである云ひ、（四卷四八七頁）又經中盛んに所々に菩薩の諸地次等相續を説いてゐるのであるが、遂に「それは外道の邪見に墮せざらしめんが爲めであつて、第一義に於ては次第相續はなし」（四卷五〇九頁）と説き、經中涅槃を説き自覺聖智を説いてゐるが、又他の場所に於て「一切は涅槃なし、涅槃の佛あることもなし、覺と所覺とを遠離す」（四卷四八〇頁）と説くあたり、楞伽經の面目躍如たるものが窺はれるのである。

楞伽經が隨所に五法三自性を説き、或は八識又は如來藏の思想を説き、又は菩薩の十地及び三界諸法唯心所現、或は空無相の思想を説くが如き、華嚴經、般若經、勝鬘經、如來藏經等を豫想し、又瑜伽唯識の思想を多分に加味してゐる等は、楞伽經の成立と云ふ上から、又は大乘佛教思想史上から特に注意すべき事柄ではあらうが、然し楞伽經の特殊性は飽くまでも自内證の境界を端的に顯現してゐる所にある。それ故に楞伽經中に盛られてゐる様々な大乘的思想は、その自覺聖智の境界の立場に即して説かれ、その境界（sacra）の風光を表示する爲めに、それらの大乘的思想を借り用ひたものに過ぎないと信ずる。

楞伽經に於て隨所に言説の妄想を離脱せよと云ひ、我は諸佛及び諸菩薩と一字を説かず一字を答へず(七卷六一五頁)と説き、又大慧が佛に、不説是佛説とは如何なる意味であるかの間に對して、それは自證法(Pratyānāharmata)と本住法(Paṇāśathidharmata)との二法に因つてであると答へ、その理由を説き、自證法とは、諸佛も吾も同じく證する所にして、言説の相を離れ名字の相を離れ、分別の相を離れてゐる。本住法とは、佛の出世不出世に係はらず法住法位法界法性皆悉く常住(七卷六〇八頁)なりと答へてゐる。更に楞伽經では、佛の世界には言説なし、言説は是れ作相のみと云ひ(註廿三)、佛法を顯揚するには或は揚眉、或は動睛、或は笑、或は聲咳、或は動搖に依るのであると云ひ、瞻視を以て、諸の菩薩をして無生法忍及び特勝三昧を發得せしむると説いてゐる。是に於て、楞伽經はその面目の最高峰に達してゐる。「集註」等はこれに對して、「これ佛祖所傳の密旨なり」と註してゐるが(註廿四)、これは恰も禪宗に於て人々を接化するには或は拈槌、或は豎拂、或は揚目瞬目を以てするので同一轍ではないが(註廿五)、以上を以て見て、この經を心印として菩提達磨が慧可に附與したと云ふ事の意義深きを愧はざるを得ない。

二

自覺聖智の境界は、唯眞實の修行者に顯示されるものであつて、聲聞緣覺及び外道の興り知り得る境界ではないとせられる。楞伽經が宗通及び説通を説くことは有名であるが、宗通とは如實法

(Siddhāntanaya)であり(註廿六)、まさしく自覺聖智所行の境界であり、これに反して、説通とは言説法(Desanayana)であつて種々なる方便教を指すのである。然して如實法は修行者の爲に、言説法は凡夫の爲めに説かれる。それでは修行者とは如何なるものを意味するであらうか。

大體楞伽經では、聲聞緣覺の二乘及び外道の徒は唯心所現を覺せざるものとせられる。佛説と外道哲學との根本的相違は、佛陀は緣起・諦・解脫を以て主となす(註廿七)に對して、外道哲學では、勝(Pradhana)自在(Ivara)時(Kālu)微塵(Anu)作者(Kartu)等の實體を立てるにあると云ひ、經中盛んに諸法唯心の理を説いて外道學說の迷妄を破してゐる。「入楞伽心玄義」では(註廿八)所詮宗趣門第九立破無礙門に於て、楞伽經は萬法唯心を立て、以て邪見外道、法執二乘、謬解菩薩の三病を治すると論じてゐる如く、それに依つて能取所取の二元論的實在觀は破せられ、従つて自覺聖智の境界は明らかになされる。眞實の修行者は、如實に諸法唯心なる所以を實踐する菩薩を意味するのであつて、佛に於ける唯心を見ることに依つて自覺の境界に達し得られるのである。楞伽經に四種の修行法が説かれてゐる。四種法とは一、自心所現を觀察すること、二、善く生住滅の見を遠離すること、三、善く外法無性を知ること、四、専ら自證聖智を求めること(七卷五九九頁)であり、この四種法を成就する者を大體修業者と名づけられる。この四種修行法の實踐的原理は、一の自心所現を觀察することだけではない。何となれば、第一を體認することに依つて、即ち三界唯是自心(三界唯是

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

(九)

心作、十卷、五三〇頁)を體得することに依つて、餘の三法は必然的に實踐されるからである。つまり、この四種修行法は菩薩行である、楞伽經に於て(註廿九)六波羅密(出世間上々波羅密)を説くが、楞伽經の六度は特殊の意味内容を持つ。即ち六波羅密とは、自心の二法(能取所取)は唯これ分別所現と覺し、妄想執着を離れ、一切衆生を利益せんと欲せんが爲めに、常に檀波羅密を行じ、諸境界に於て分別を起さざれば則ち尸波羅密を修し、分別を起さざるの時に於て能取所取の境界は實に非すと認知する。これを曇提波羅密を行すると名付け、初、中、後夜常に精進して如實法に隨順して分別を離れる。これを毘梨耶波羅密と名付け、分別心を離れ外道の涅槃の見に墮せざるを禪波羅密と云ひ、分別を離れ身心脱落(依ニ加實修行轉身、十卷五六〇頁)して聖智内證の境界を獲得するのである。これに依つて見れば、楞伽經に於ける修行者の實踐的原理は、即ち自覺聖智の境界に至らんとする者の實踐の原理は、「唯心」を見よと云ふことにあると思ふ。分別のあるのは唯心を見ないからである。經では他の場所に於て、「妄想不轉是人見自心」(四卷五〇四頁)と説き、又「建立誹謗皆是凡愚不了唯心而生分別非諸聖者」(七卷五九八頁)とも説いてゐる。

三

それでは楞伽經に現はれてゐる唯心思想は如何ようであらうか。但し四卷楞伽では、七卷楞伽が唯心所現若しくは單に自心又は唯心と譯されてゐる場合多く、自心現量と云ふ語で説かれてゐる。

尤も四卷の方でも唯心と云ふ譯語はある。例へば、唯心直進とか三界唯心分齋と云ふのがある。十卷楞伽では、涅槃及び法界、眞如、空、實際を唯心と説くと云ひ(五四三頁)、四卷や七卷では、この場合唯心を心量と云ひ換へて、心量とは如々(四卷楞伽では眞如を如又は如々と譯す)涅槃、法界を指すのであると説き(四卷五〇〇頁)、又無心之心量を我は説いて心量となすと云ひ、又一切所見を離れ、得も無く亦生も無し、我説いて心量となすと説き、更に量を説明し、量とは自性の處、性は究竟妙淨なり、我説いて名づけて量となす(同上)と云ひ、又他の場所に於て心量は説くべからず、二心を觀察せずと云つてゐる、(自心理量。本來無相。故於現相。不見有無二種之心(佛語心論))。又一方では妄想習氣轉じ、種々の心生するあり、境界外に於て現はる、是世俗の心量なり(同上)と云ひ、或は自妄想心量(四卷五〇〇頁)とも説いてゐる。これに依つて見ると、心量には佛に於ける心量と世俗の心量との二種があることが解る。七卷の偈頌品に至ると、明らかに唯心を定義して、佛にも非ず、眞諦にも非ず生にも非ず、亦滅にも非ず、亦十二支も無し、一切の見皆斷ず、我は是を唯心と説く(六二九頁)と、又同じく偈頌品に、不生にして生を現じ、不滅にして滅を現じ、普く諸僥刹に於て、頓に現するごと水中の月の如し、一身を多身となし、機に隨つて心中に現す、是故に惟心を説く(六三二)と説いてゐる。前者は唯心の體を意味し、後者はその相と用を意味するものと思ふ。唯心無相の思想は起信論に於ても見られる。心は心を見ず、相として見るべきなしと云ふのがある。慧遠は(註三十)起信論

義疏に於て、この文に心は心を見ずと言ふは、眞に就いて眞を論するなり、分別有ること無し、能所無きの故に、相として得るべき無きの故に、心を見ざると名付くるなりと釋してゐるが、これと全く同じ思想が七卷の偈頌品にも現はれてゐる。即ち刀の自ら割かざるが如く、指の自ら觸れざるが如く、而して心は自ら見ず、その事亦是の如し(六三四)と。四卷楞伽では或場所に於ては、微心と云ふ言葉が現はれてゐる、即ち諸因縁を遠離し、亦一切事を離る、唯微心ありて住す、想も所想も俱に離る(五〇七)とか、或は三界微心など云ふ言葉も現はれてゐる。

楞伽經に於ける唯心及び心量は亦如來藏を意味する。大慧が佛に、世尊の説く所の如來藏の義は(註卅一)外道の神我に同じきにあらずやと云ふ問に對して、我の説く如來藏は神我と全然その本質を異にし、我所説の如來藏とは、空・實際・涅槃・無相・無願又は法性法身を云ふのであると答へ、寂靜無相を如來藏と説くと云ひ、無我如來藏を知るべしと説くのである。如來藏と涅槃とは同じものであることは右に依つて知られるが、又他の場所に於て、涅槃とは聖智自覺の境界なり(四卷四九二頁)と云ひ、七卷楞伽の序品には、寂滅とは一縁(今卷楞伽では一心と譯さる)であり、一縁とは最勝三昧にして、これより能く自證聖智を生じ、如來藏を以て境界となす(五九〇)と説いてゐる。是れに依つて見ても知られる如くに、如來藏や唯心や心量等は自覺聖智の境界に名附けたものと見てよからう。世親は(註卅二)佛性論に於て如來藏を説明する中、「一切諸法は如來の自性を出でず、無我を相と爲す、故に

一切諸法を説いて如來藏と爲す」と論じ、又如來藏と同義語である佛性が、涅槃經に於て佛性とは（註卅三）首楞伽嚴三昧なりと説かれ、又第一義空等とも云はれ卅四、更に眞如に就いて見ても起信論に（註卅五）「眞如の體は遣るべきあることなし、一切法悉く皆眞なるを以ての故に、亦立つべきなし、一切法皆如に同じきを以ての故に、當に知るべし一切法は説くべからず、念すべからざるの故に、名づけて眞如と爲すと論じてゐるが如き、それらの名稱は楞伽經から云へば悉く自覺聖智の境界に名づけられたものであつて、決して一の實體（現象に對する）と云ふ如き意味は毫も含まれてゐないのである。又西洋哲學で云ふ規範意識と云ふ如きものでもなければ、見聞覺知する靈知と云ふものでもない、然し又斷空ではない。楞伽經に、如來とは現前境界猶掌中に阿摩勒果を視るが如し（四卷五一〇頁）と説くが如くに、身心を擧げて色を見取し、身心を擧げて聲を聽取する時眞に寂滅は實在するのである。

四

楞伽に於ける唯心や如來藏が斯くの如きものであるとせば、楞伽經に云ふ諸法は唯心の所現であるとか、又自身現量と云ふ如きものは、如何なることを意味するのであらうか。楞伽經で云ふ三界唯心 (Triḥave cittomātra) なる思想は、決して唯識説の（註卅六）三界唯識と云ふことにも、亦西洋哲學の唯心論的にも、或は教相學の所謂本體と現象との關係と云ふ如き意味にも解されてはならない

と思ふ。諸法の唯心所現なる思想は、諸法と唯心との二あるのではない。又は現象としての諸法を事實的に展開すると云ふ如き意味ではない。あるものは唯一である、その一なるものが種々なる縁に随つて、或時は眞なる一切を現じ、或時は妄なる一切を現するのである、一方を證すれば一方は暗いのである。それではかゝる關係を楞伽經では如何ように説かれてゐるであらうか、これを如來藏隨縁の思想や八識の思想に於て見ることが出来る。楞伽經に於ける八識の思想は經中最も難解なるものとせられ、従つて註釋者の見解も一樣でない、然しそれらは決して唯識的に解されてはならない、楞伽經の根本的立場から見なければならぬと思ふ。

先づ（註卅七）如來藏隨縁の思想から考察して見よう。楞伽經では、如來藏は善不善の因となり、（衆生依_レ如來藏_レ故五造生死、十卷五九頁）無始虛偽惡習の爲めに薰せられて、七識無明住地を生じ、海浪の如しと説く（七卷、六一九、四卷、五一〇、趣意）、その薰せられる位を藏識（四卷ではこの場合藏識となつてゐる、十卷では藏識は阿梨耶識と譯す）と名づけられる。故に藏識は如來藏と生滅心（七轉識）との和合の状態を意味するものと解されやう。起信論で云へば、依_レ如來藏_レ故有_レ滅心所謂不生不滅與_レ生滅和合非_レ一非_レ異名爲_レ阿梨耶識の阿梨耶識と同じ意味を持つものであらう。それは藏識は何れかと云へば、生滅心に働きかけてゐる意識状態である、然し必ずその中に如來藏を要請してゐる、つまり藏識とは如來藏を負うて生滅心に働く心理活動であると云ふことが出来よう。この如來藏と生

滅心(七轉識)との不一不異なる關係を楞伽經は、(一)、轉識藏識真相。若異者藏識非因。(二)若不異者。轉識滅。藏識亦應滅而自真相不滅。是故大慧。非自真相識滅。但業相滅。若自真相滅者。藏識則滅。大慧(註廿八)藏識滅者不異外道斷見論義(四卷四八三頁)と説くのである。(一)は如來藏の隨緣を、(二)はその不變を意味し、又外道の常過にも斷過にも墮せざることを證してゐる。又他の所に於て、説如來藏名藏識與七識俱起(七卷六二〇)と云ひ、又は、如來藏受苦樂與因俱有生滅(七卷六二一)と云ふのは、その不異なる關係を云ふ、又、菩薩摩訶薩欲得騰進。應淨如來藏藏識之名。若無如來藏名藏識者則無生滅。と説くのはその不一(如來藏と七轉識)なる關係を示すものである。但しこゝで云ふ藏識は、生滅心をその表面に出して云ふのであり、前の藏識滅者不異外道斷見論義と云ふ時の藏識は、如來義をその表面に出して云ふものと解すべきものと思ふ。然し單に生滅心と云つても孤立的に存在するのではなく、必ず其中に如來藏が要請されてゐなければならぬ。生滅心は必ず依如來藏あるのである。如來藏を要請すると云つても、生滅心の中に實體として存在すると云ふ如き意味ではない。又如來藏と云つても必ず生滅心を豫想するものでなければならぬ。若し如來藏が生滅の諸法に隨緣せないならば、凝然常に墮するからである。然し如來藏が生死の諸法に隨緣する時、それ自身本質的に持つ不生滅心を失はばこれ斷空に墮する。不生滅心を、即ち如來藏を失はないが故によく生死に隨ふのである。如來藏と生滅心とが和合すると云つても、別

に生滅心なるものがあつて如來藏と和合すると云ふ如き意味ではない。あるものは、唯眞に一なるものである。和合するとは眞に一なるものゝ働きを意味する。法藏は(註卅九)起信論義記に於て、不生滅心と生滅心との不一不異なる關係を釋する中に於て、十卷楞伽經の、如來藏不在阿梨耶識(藏識を意味す)中。是故七種識有生有滅。如來藏不生不滅。(十卷五五六)の文を引用して、これは如來藏と七轉識との不一の關係を明かすものであると云ひ、然しそれは和合(如來藏と七轉識)せないと云ふ意味でない論じ、此の中の如來藏不生滅は七識生滅に即するの不生滅であり、又七識生滅とは如來藏不生滅に即するの生滅であると釋してゐる。不一の中に不異を豫想し、不異の中に不一を豫想する。生死の諸法を悉く如來藏に包攝する時、(法藏の所謂末を攝して本に歸すること)一切が悉く眞となるのである。生死即涅槃である。又如來藏を生死の諸法に包攝する時一切は悉く妄となるのである、(法藏の所謂本を攝して末に歸するとはこの意味である)涅槃即生死である。これ如來藏が生死の諸縁に隨ふのである。眞と妄とが交徹するとか相即するとか云ふのはこの意味である。實在するものは眞に一なるもののみである。眞と妄との二體あるのではない。唯眞に一なるものゝありように依つて或は働き方に依つて種々なる世界が現はれるのである。それ故眞に一なるものが働く爲めには、眞は妄に即し、妄は眞に即してゐなければならぬ。慧遠は(註四十)大乘義章八識我に於て、唯眞のみにしては諸法を生せず、又單に妄のみにしては諸法成らずと論じ、その然る所以を説

いて、唯妄無眞妄體不立。故亦無作(中略)眞妄相依造作一切諸法。と論じ、又法藏も義記に(註四一)論云唯眞不生。單妄不成。眞妄和合方有所爲。此則本末鎔融際限不分。と云つてゐる。

右の如き相依關係は又八識論に於ても見ることが出来る。楞伽經では全意識體系(八識)を現識(Knyātvignāna)と分別事識(Vastupratikalpavijnāna)とに二分する、但し四卷楞伽經ではこれに更に眞識を加へて三とする。現識は八識染分(藏識)を、眞識は八識淨分(如來藏)を意味する。然し、現識や分別事識と云つても必ず其の中に如來藏が要請されてゐなければならぬ。「註解」では(註四二)眞識即如來藏。現識即如來藏所轉亦名識藏。名轉而體不轉(中略)合(上)眞識現識爲一藏識。と云つてゐる。分別事識は餘七識を意味する。法藏は義記に於て、この現識を起信論の三細中の現相と見、又分別事識を六塵と見てゐる。次にこの現識を起信論に論ずる現識と比較すると、起信論では、現識とは、所謂能現一切境界猶如明鏡現於色像。現識亦爾。隨其五塵對至即現無有前後以一切時任運而起常在(前)故。と説く。楞伽經では、大慧。如明鏡中現諸色像。現識亦爾。(七卷五九三頁)と説くのである。これに依つて見ても兩者意味を同じくする。然も起信論では現識は三細中の境界相(現相)と同じ意味を有する。「義記」では、これらの現識を(註四三)、「此等並約本識現相義説。」と釋してゐる。それ故又この現識は境界(Vishaya)を意味する、即ち現識は分別事識の論理的基礎となるものである、即ち分別事識は現識(分別事識)から云へば境界を因として起るのである。

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

(一七)

現識は何に因つて起るか云へば、不思議熏及び不思議變を因となし、分別事識は分別境界及び無始戲論習をその因となすとせられる。法藏は(註四四)起信論義記中、楞伽のこの熏變を説明して、「不思議熏とは無明が眞如を熏することを意味し、熏すべからざるに而も能く熏する故に不思議熏と呼ぶ」と云ひ、又不熏の熏とも呼び、不思議變とは、無明の熏を受ける眞如の妙用であつて、變異すべからざるに而も能く變異す、故にこれを不變の變と呼んでゐる。故にこの解釋からすれば、楞伽の現識の因には眞如を熏する無明と、その無明の熏を受ける眞如との二を含むものと見られるであらう。然して又「義記」では、然此熏變甚微且隱故所起現識行相微細。於中亦有轉識業識。擧塵兼細。故但名現識即是不相應也。と云つて、楞伽の現識の中に原理起信論の轉識業識を含めてゐる。然し現識の中に同時に眞識(如來藏)が要請されてゐなければならぬ。

分別事識の因たる分別境界(四卷では取種々塵)は、明らかに現識所現の境界を意味する、この境界が實に對立的意識の原理となるものである。これが能く賴耶心海を動かし、諸々の意識の波浪を生起せしむるのである。又分別事識の因たる無始戲論習氣(無始妄想熏)とは、實に又現識の因なるものではないか、實に經自身が、此二識無異相立爲因(七卷)(此二壞不壞相展轉因、四卷)と説いてゐるやうに、この現識と分別事識とは相依相關の關係に在るものなることは明らかである。

此の相依の關係は、又大慧が佛に對して、佛が涅槃とは意識の滅なりと説いた時、それでは七識

は滅せないのであるかと云ふ間に答へて、

(一) 大慧。以彼爲因及所緣故。七識得生。大慧。意識分別境界起執着時。生諸習氣長養藏識。因是意俱我々所執。思量隨轉。無別體相。

(二) 藏識爲因爲所緣故。執着自心所現境界。心聚生起。展轉爲因。(生種々心猶如束竹迭共爲因、十卷五三八)

(三) 大慧。譬如海浪自心所現境界風吹而有起滅。是故意識滅時。七識亦滅。(七卷六〇六頁)

(一)は意識(六識)と七識との相互關係を示す。(二)は藏識と六識との關係を明かす。斯くの如く、藏識心海を所依として境界に執着する意識が更々に種々の習氣を生じ、又これが藏識心海を動かしかくして全意識體系は俱時に成立し、各々轉々して互に因となり果となるのである。それ故にその中の一を取るも餘のすべてはこれに俱ふのである。故に意識滅する時七識も亦滅し、一切が涅槃に包攝されるのである。又意識を中心とする時、一切が意識に俱して同起し、妄なる一切が現するのである。

又諸流の生滅の相が説かれてゐる、即ち諸識には、生(utpada)住(shti)滅(nirodha)ありとせられ、それに、相續(Grāhandh)の生・住・滅と、相(sakshand)の生・住・滅ありと説かれる。楞伽經では、生と住とに就いては別に説かれてゐない、その相續の滅とは、所依田(Aśraya)及び所依緣(Alambana)

の滅とせられる。前者は無始以來の虛妄の習氣であり、後者は自心所現の分別境界であるとせられる。又相の滅とは、阿梨耶識を虛妄に分別する種々の習氣を指すとせられる。四卷楞伽では、若覆彼眞識種種不實諸虛妄滅則一切根識滅。大慧是名相滅(四卷四八一頁)と説かれる。これに依つて見れば、相滅の因と、相續滅の因となるものと全く同一なる無始妄想熏であることになる。生、住も亦この因あるに依つて生じ、又住するのである。相續とは意識の間斷なき活動性(四卷では流注と譯す)であり、相とはその表面に顯れた意識である。「義記」では、(註四五)起信論の、分別生滅相二者有二種云何爲二。一者龜與心相應故。二者細與心不相應故。の文を釋する中に於て、その不相應心を釋し、其體微細恒流不絶と云ひ、四卷楞伽の流注を引用し、經中説爲流注生住滅と云ひ、經中名を出して別に相の如何なるものであるかを説かないが、今この論主は、相應不相應の義に約してその二種の龜細の心の生滅の相を顯すると釋してゐる。これを起信論的に云へば、相續は三細に當り、相は六麁に該當するものと見られやう、従つて又、相續と相とは、前の現識と分別事識と、その意味内容に於て同じであると思ふ。相續と相とは同時に存在し、相續の生ずる時俱に相は生ずるのである。然も相續の因である所依因(無始以來の虛妄の習氣)及び、所依緣(分別境界)は又、現識の因でもあり、分別事識の因でもある。それ故に、三細六麁の如きも楞伽經的に云へば、諸法展開の形式でなく諸法の相依關係の形式である。それではこの事は何を意味するか、即ち三細六麁が如來藏

から發生すると云ふのでなく、如來藏が境界(虚妄習氣)に隨縁する時一切が三細六塵となるのである、即ち妄なる全體が顯現するのである、又如來藏が境界を熏習する時、即ち三細六塵の一切を包攝する時眞なる一切が現はれるのである。如來藏が三細六塵の諸法に時間的に先在するのでない。三細六塵の諸法は必ず依^{ツテ}如來藏^ニ存在するのである。眞に實在するものは境界(ground)あるのみである。この境界が如來藏の不生滅心と三細六塵の生死の一切法との、即ち眞と妄との二方面を同時に俱有するのである。その二方面が相即交徹するが故に、よく働きがあるのであり、然もこの働きには二相はないのである。一切諸法を外にしては如來藏はなく、如來藏を外にしては一切諸法はないのである。

五

斯くの如くに、楞伽經は如來藏と生死の諸法との關係を説くのであるが、その重要性を持つものは入識無相の思想である。即ち大慧が佛に藏識海浪法身の境界を説き給へとの問に答へる中、不壞相有^レ入。無相亦無相。と説くのである。虎關師鍊禪師はこれに對して、「不壞入相はこの經の旨趣、故に諸名相皆是實相、三細六塵全體眞識」(註四六)と云ひ、又その場所に於て、「諸識各轉業眞相を具す(註四七)、或は凡、或は聖、本間隔なし、若し六識に於て能く眞相を見れば、凡に即して而も佛、若し八識に於て亦轉相を見れば、佛に即して而も凡、凡聖融會、眞妄合同、凡何をか厭はんや、佛何

をか求めんや、只是の業相自ら上下を作す、即ち是の業相亦淨亦染、染淨不二、尙何をか言はんや、智筈法界なり。問ふ、その義如何。答ふ、諸識總じて二種三相あり、猶法界渾之智の如し」と説き、又法藏は華嚴探玄記に於て十重唯識を辨ずる中、その第七に、攝相歸性故説唯識。謂此八識皆無自體。是如來藏平等顯現。餘相皆盡。經云一切衆生卽涅槃相。不復更滅等。楞伽經云不壞相有八。無相亦無相。と論じ、(註四八)又入楞伽心玄義に於ては、如虛波攪水成。水徹於波相則無波而非水。成波及名水。則波徹於水體。無水而無波。動靜交徹二諦雙立と云ひ(註四九)、又、卽眞卽俗、卽違卽順。卽成卽壞。圓融自在同時俱現。聖智所照無礙頓見。是謂二諦甚深之相。經意在此。(註五十)と釋してゐる如き、能く如來藏の妙用を現してゐる。斯くの如きことが宿命的や機械論的に解されてはならない。唯證法に萬法あらしめ、出路に一如を行するのである。

註一 「註解」天正藏經、三九卷、三四三頁。

註二 「論疏折衷」日本大藏經、方等部章疏三、五頁。

註三 「佛語心論」同、三。

註四 大正藏經、三九卷、四二八頁。

註五 日本大藏經、方等部四、一〇八頁。

入楞伽心玄義筈要鈔には、各註釋者の見解をあげてゐる。即ち、

以「五法等」爲「言」。(李通言)

以「實相佛心自覺聖智」爲「宗」。(智覺延壽)

以了_二妄無性_一爲_レ宗。(柏庭、善月)

以_二唯心直進自覺智_一爲_レ宗(智旭)等をあげてゐる。

註六 「大乘綱目覺帳」と呼んだのは鈴木大拙先生である、「宗教研究」五ノ六楞伽經研究雜記。(二〇頁)

註七 七卷楞伽經、大正藏經十六、五八七頁。(十卷楞伽同、五一四—五一五)

註八 同、四八〇頁。

百八の問の中には、藤樹等の行列は誰がよくこれを作るか、天衆に幾種の別があるかとか、又日月星宿とは何であるかとか、伽陀や長行に幾種あるか云ふ如き問偈があるが、それが自覺聖智の境界と如何ように關係するのか、經では何ら明らかにされてゐない、佛は百八の問に對して悉く答へるのでなく、その中のあるものに就いて特に答へるのである。

註九 鈴木大拙先生、『The Eastern Buddhist』昭和三年七月發行)二〇四頁、二〇六頁參照。

註十 大正藏經十六、四九二頁。(四卷楞伽經)

註十一 忽滑谷氏、禪學思想史(上)、三二八頁參照。

註十二 註大乘入楞伽經、大正藏經三九、四六〇頁。佛語心論一七一頁。(日本大藏經、方等部三)

註十三 大正大藏經、四八四頁。

註十四 同、五九四頁。

註十五 若修行者觀_二此法_一(名、相分別、正智、如々)入_二於如來自證境界_一。又曰く、三性八識及_二無我悉入_二五法_一。(七卷楞伽、大正藏經、六二〇)

圓成自性謂_レ離_二名相事想一切分別_一、自證聖智所行眞如。此是圓成自性如來藏心。(同、五九八)

註十六 松本文三郎博士、「達磨」二四八及び三一四頁。

註十七 賢首は五教章に於て、頓者言說頓絕理性頓現。楞伽云、頓者如_二鏡中像頓現非_レ漸_一。此之謂。(湯次先生、五教章講話、一五九)

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

(二四)

註十八 四卷楞伽に曰く、菩薩摩訶薩觀_レ語與_レ義非_レ異非_レ不異_レ若語異_レ義者則不_レ因_レ語辯_レ義而以_レ語入_レ義如_レ燈照_レ色。(大正

大藏經、五〇〇)

註十九 七卷楞伽、六一〇頁。(同上)

註二十 佛語心論、日本大藏經、方等部三、二三九頁。

註廿一 四卷楞伽、大正藏經、四九四頁。

註廿二 同、五〇二頁。

註廿三 同、四九三頁。

註廿四 續藏經、第二十五套、三二八頁。

註廿五 佛語心論(一八二頁)及び鈴木大拙先生、Eastern Buddhist(二〇八頁)參照。

註廿六 七卷楞伽、六一二頁。(大正藏經十六)

註廿七 同、六〇二頁。

註廿八 大正藏經、三九卷、四二九頁。

註廿九 同、五二二頁(四卷)五六〇頁(十卷)六二二頁(七卷)參照。

註三十 大正大藏經、四四卷、一八七頁。

註卅一 世尊修多羅說、如來藏自性清淨。轉_二三十二相_一入_二於一切衆生身中_一如_二大僧寶垢衣在所_レ纏。如來之藏常住不變、亦復如_レ是。而陰界入垢衣所_レ纏。貧欲恚癡不實妄想塵所_レ汚。一切諸佛所_レ演說。云何世尊。同_二外道說_レ我。言_レ有_二如來藏_一耶。(四卷、四八九頁)。

註卅二 大正大藏經、三一卷、七九六頁。

註卅三 禪學大系、經論部、三三二頁。

註卅四 大正大藏經、十二卷、五二四頁。

註卅五 同、三二、五七六頁。

註卅六 三界唯心と云ふ、又十地經の、三界虚妄。唯是一心作。と云ふ場合、唯心又は一心を唯識の唯識(Vijnāna)と同義語と解すべきではない。唯識宗では、三界唯心を三界唯識と言ひ換ふるが、唯識宗で言ふ唯識は事心であつて理心と區別され、事心は有漏識であり、理心の相即交徹は絶対に許されない。唯心を第一義心と解するが華嚴の立場でなければならぬ。

或依有漏以呼唯識華嚴經說三界唯心就於世界說唯識故。法苑義林章、大正藏經、四五、二五九頁。

正同華嚴經三界唯心說亦同中邊論云虚妄分別云三界唯心云妄分別皆歸有漏心義故也。此即凡夫自觀自心速至覺位之要術也。(覺夢抄、日本大藏經、方等部二、四五頁)

註卅七 法藏は起信論義記の序文に於て、楞伽起信、密嚴、寶性論を如來藏緣起宗としてゐる、而してその所以を論じて、理事融通無礙說以此宗中許如來藏緣成阿梨耶識此則理徹於事也。亦許依他緣起無性同如此則事徹於理也。(大正藏經、四四、二四三頁)。

註卅八 諸愚凡人見六識滅起於斷見不了藏識起於常見。(七卷楞伽、大正藏經十六、六二二頁)。

註卅九 大正藏經四四、二五五頁。

註四十 續藏經、第一輯、第二篇、第一套、四〇四頁。

註四一 大正藏經、四四、二五五頁。

註四二 同三九、三五〇頁。

註四三 同、四四、二六二頁。

註四四 同、四四、二六九頁。

註四五 同、四四、二六九頁。

註四六 同、九六頁。

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

楞伽經に於ける自覺聖智の境界に就いて

(二六)

註四七 佛語心論、日本大藏經、方等部三、七八―七九頁。

註四八 大正藏經、三六卷、三四七頁。

註四九 同、三九卷、四二九頁。

註五十 同、三九卷、四二九頁。